

「親愛なる阿呆とサイテー」

星野渚

登場人物

近江ミヨ（29） 田舎から東京に上京してきたOL。
秋月聖（29） ミヨの幼馴染。イケメンだが性格が悪い。
加瀬（38） ミヨの不倫相手。ミステリアス。
木下（23） ミヨの同じ部署の後輩。
秋月星南（29） ミヨの幼馴染、聖の双子の妹で美人。
近江美奈子（57） ミヨの母。

医師

看護師

課長

従業員

司会者

係員

○ミヨのアパート・玄関前（深夜）

ドアを開け、すっぴんの近江ミヨ（29）
が怪訝そうに秋月聖（29）を見ている。

聖「よっ」

飄々と手を挙げ、頬はうつすら赤い。

ミヨ、さらに眉間にしわを寄せ、

ミヨ「……お帰りください」

閉まるドアに、聖、足を滑り込ませて、

聖「やだやだ、冷たくない？ 十年振りの再

会なのに。そんな薄情な子に育てた覚え

はありません」

扉を開けようとする聖に抵抗するミヨ。

ミヨ「あんたに育てられた覚えはないわ。十年

ぶりにフラッと来るなよ、酔っ払いが。

今何時だと思ってるわけ」

聖、自分のスマホをほらと見せて、

聖「2時12分だけど？」

ミヨ「時間聞きたいんじゃないわ！ んな夜

中に、一人暮らしの女の子の家に「よっ」

って、お前。失礼すぎるでしょ」

聖「うつわく、出たよ。いい年して子つける
奴く。アラサー女子ってよく聞くけどさ、
明らか破綻してねえ？ うける」

と、言いつつ上がるうとしている。

ミヨ「どさくさに紛れて上がるうとしてんじ
やねえよ」

聖「そもそもこんな時間にドア開けるとか不
用心すぎない？ 俺心配。ベッド貸して
よ、もう眠くてさあー」

ミヨ「自己中か！ さっさと帰れ！」

聖「シート！ 深夜に大きい声出すなって、
何時だと思ってるの？ 近所迷惑」

ミヨ「お前が言うな……！」

○同・玄関

ミヨを後目に入ってきて靴を脱ぐ聖。

聖「そもそもこんな時間からあんな田舎に帰
れるわけないじゃん、お前馬鹿？」

ミヨ「知るか、歩いてでも帰れ」

靴をぬいだ聖、こちらを振り返り、

聖「えっ、てか暗くて気づかなかったけど。

お前太ったんじゃない？」

ミヨ「ほんとあんなたってやつは……」

○夢

夕方。

制服姿のミヨ（18）が秋月星南（18）

と田んぼ道を歩いている。

星南、ミヨの手を掴み、

星南「うち、みよんがいれば最強だよ」

幸せそうに微笑むミヨが頷く。

手をつなぎ歩いていると、夕日が一層

まぶしくなって、目を細めるミヨ。

目を開くと横に星南はいない。

ミヨ、気づいて振り向くと、星南が後

方に立ち止まっている。

先程とは別人に見えるほどの冷たい顔。

星南「無理」

○ミヨのアパート・部屋（朝）

ベッドから飛び起きるミヨ。

ミヨ「……サイアク……」

くしゃみをするミヨ。ベッドから布団が半分ずり下がっている。

布団を引っ張り、カーペットの上で気持ちよさげに眠る聖。

星南と似た顔立ちである。

ベッドから足を延ばし、聖を蹴りつつ、

ミヨ「おい、起きろ」

聖「（寝ぼけて）むにやむにや……」

ミヨ「起きろって……！」

ミヨのスマホから通知音が。

開くと、「おはよ、今日も行くよ」と

メッセージ。

ミヨ、諦めたように支度をし始める。

○会議室（朝）

席で項垂れるミヨが大きなくしゃみをかます。

資料を席に配っている部下の木下（23）

木下「きたな、風邪ですかー？」

ミヨ「んー……昨日あんま眠れなくて……」

木下「わーやだやだ、急に猥談ですか」

ミヨ「なんでそうなる」

木下「気をつけてくださいよね。先輩もう若くないんですから」

ミヨ「失礼な」

加瀬の声「何の話ー？」

入口からこちらを見ている加瀬（38）。

ミヨ、さっと立ち上がり、

ミヨ「おはようございます」

木下「先輩がセクハラしてきたんです」

ミヨ「ちよつと、違うでしょ」

木下「ええー昨日眠れなかったって、それし

かなくないですか？」

ミヨ「君は朝から元気だな……」

加瀬「確かにそれは聞き捨てならないな」

ミヨ「加瀬さんまで、勘弁してくださいよ」

○ミヨのアパート（浅夕）

スマホゲームしている聖、時計を見る。
時刻は夕方である。
部屋の冷蔵庫を開けるも何もない。
舌打ちをしてゲームを再開する聖。

○ホテル・客室（夜）

目を開けるミヨ、周りを見渡すと、
ルームサービスを配置している加瀬。

ミヨ「ごめん寝てた」

加瀬「ううん、顔色よくなってよかった」
と、ミヨの頭を撫でる。

スマホの通知音。開くと知らない番号。

「晩御飯ピザ注文しといた 聖」のメ
ッセージが。

加瀬「大丈夫？」

ミヨ「うん、もちろん。私ワイン入れるね」
スマホをしまうミヨ。

○ミヨのアパート（朝）

目を覚ます聖。

テーブル上のピザが冷えきっている。

聖、スマホを見るも、メッセージは既読のままです。ミヨからの返事はない。

聖「あのクソ女」

と、立ち上がって、出る支度を始める。

○ホテル・ラウンジ（朝）

人の少ないラウンジで朝食を取る二人。

ミヨ、フレンチトーストを頬張り、

ミヨ「んーんーんーたまるんっ」

加瀬「かわいいね」

ミヨ「これを食べるために木曜日はあるよう

なものよ」

加瀬「えー、そこは俺と会うためにしてよ」

ミヨ「週一じゃなくて、もっと食べさせてく

れもいいんだよ？」

加瀬「素直じゃないなー、もっと会いたいわ

て言ってくれればいいのに」

ミヨ、何か言いかけて、飲みこみ、

ミヨ「天邪鬼って母からお墨付き」

と、美味しそうに頬張る。

加瀬「そんなに美味しいの、それ。僕にも一口ちよーだい」

ミヨ、切り分けたフレンチトーストを加瀬に向けると横から手が伸びてくる。

そのままミヨの手ごと引き寄せ、切り分けたそれを頬ぼる聖。

聖「ほんとだ、うめえ」

ミヨの横にドカッと座る聖を、啞然と見ているミヨと加瀬。

聖、二人の視線に気づき吹き出し、

聖「何その間抜け面。てか俺ずっと待ってたんですけどーーーーー」

ミヨ「な、なに……なんで……」

加瀬「え、誰？ ミヨちゃんの知り合い？」
聖、ミヨの肩を引き寄せ、

聖「初めまして、こいつの元カレです。そして永遠にさようなら。俺たちヨリ戻すんで」

と、強引にミヨを連れて行こうとする。

ミヨ「ちよつと、何テキトーなこと！ おい」

加瀬「放してもらえる？ 嫌がつてるでしょ」

聖「あんたに関係ないでしょ」

加瀬「俺の恋人だから」

聖「は？ 嫁も子どももいて何言ってるの？」

「！」と驚くミヨ。

聖「行くぞバカ」

と、無理やりミヨを連れていく。

ミヨ「ちよつと」

○道（朝）

平日の朝、出勤する人々の間をミヨの手を引いて歩く聖。

ミヨ「放して！」

と、腕を強引に振りほどいて、

ミヨ「恥ずかしいから放してって！」

聖「恥ずかしい？ さっきまで自分のやってたことが？ 不倫するために毎週時間割いて、いい年して阿保なの？」

ミヨ「あんたがなんでそんなこと知って……」

聖「お前がどこの誰に訴えられようが、借金
背負わされようがどーでもいいけどさ」

ミヨ「じゃあ放っておいてよ！」

聖「東京に出てきてまで何ダサいことやって
んの？ あほすぎ」

ミヨ「偉そうに……なんであんたにそんなこ
と言われなきゃなんないわけ？」

聖「見ててむなしいんだよ、お前」

ミヨ「……いい加減にしてよ……余計なお世
話だよ！ あんたに何かしてほしいなん
て思っていないんだよ！」

と、気持ちが高ぶって行って、

ミヨ「昔っから人の気持ちなんて知らん顔。
あんたのそーゆーところ、全然変わって
ない。大っき……」

聖「（被せて）嫌い？」

伸びてきた聖の手を、ミヨ、バツと振
り払い、

ミヨ「触るな、私に二度と構うな！」

と、後ずさった足が階段を踏み外す。
体がふわっと浮く。
聖がこちらに手を伸ばし、そのまま抱
き留められ、落下。
鈍い音。視界が暗くなる。

○病院・病室

包帯まみれの不機嫌そうなミヨ。
医者が説明をしているが、どこかをき
つく睨みつけている。

医者「……さん、近江さん、聞いてますか」
ミヨ「あ、はい、すみません」

医者「両足骨折。2週間は絶対安静だからね」
ミヨ「え、仕事は」

医者「歩けないのに行けるわけないでしょ」
愕然としているミヨ。

看護師の声「はい、どうぞ」
聖の声「あーん」

声の方を睨みつけると、聖が看護師に
ご飯を食べさせてもらっている。

見たところピンピンしている。

ミヨ「おいタラシ、なんでお前は軽傷なんだ」

聖「勝手に自分で落ちといて、助けた恩人に

対して第一声がそれってどうなの？」

ミヨ「あんたに潰されたからこの有様なんだ

けど。急に抱きついてきやがって」

看護師「わお、ロマンチック」

聖「下敷きになろうと思ったのに、お前の方

が重くて無理だったみたいだね☆」

ミヨ「ふっぎけんな！」

と、起き上がろうとするも、

ミヨ「いったーいーい」

医者「ほらほら、動かない」

木下「せんぱーい、PC持ってきましたよ」

入口には荷物を持った木下がいる。

× × ×

スイッチでマリカーに夢中になってい

る木下と聖とミヨ。

聖「うお、さっきと違う道きたわ」

木下「それ隠しルートっすよ」

ミヨ「わ、バナナ誰ー」

木下「俺も、先輩2週間も休みとか羨ましい
んですけど」

ミヨ「中学生か。私の分も働くんだよっ」

木下「早く戻ってきてくださいよ」

聖「木下、三十路前の女の回復力なめるな

よ？」

木下「年だから気を付けてって言ったのに」

ミヨ「心配する振りしてデイスるなよ」

聖「ねえ君たちどこー？ 今すぐくみんなに
会いたい、寂しいよー」

木下「ちよ、スターの音するんですけど」

ミヨ「来るな来るな」

木下「聖さんはケガ大丈夫なんですか？」

聖「日頃の行いがいいから俺は左腕だけっ。

うえーいゴール」

ミヨ「ふざけんなよピーチ、2位だったの
に！」

木下「首位」

聖「ピーチ、2位」

舌打ちするミヨ。

美奈子の声「何してんのあんたたち」

入口に近江美奈子（57）が。

聖「おばさん」

木下「誰おばさん」

聖、ミヨを差して、

聖「こいつの……」

ミヨ「（被せて）お母さん!？」

美奈子「久しぶり」

○同・廊下

病室から出てくる聖。

手土産を持ち、加瀬が歩いてきていて、

聖「何しに来た」

加瀬「彼女のお見舞いに来るのって変かな？」

と、通り過ぎようとする。

聖「今あいつのかーちゃん来てんの」

と、加瀬の行く手を阻み、

聖「あんた会えんの」

加瀬「……そっか」

少し、考えたあとにつこり笑って、
加瀬「せっかく来たし、君が相手してよ」
聖「さっさと帰れ、クソ」

○同・待合室

離れて座っている加瀬と聖。
他には誰もいない。

加瀬「病院って苦手なんだよねーこの匂いっ
ていうか雰囲気がさあ、昼でもなんかひ
んやりしてる気がしない？」

と、聖を見るも、無言である。

加瀬「存外優しいよね、聖くんって」

聖「あんたは見た目より優しくくないよね」

加瀬「すぐく毛嫌いされてるなー」

聖「当たり前だろ。お前みたいなやつ男から
見ても気持ち悪いんだよ」

加瀬「ストレートだなあ。でも僕たち結構似
た者同士だと思っただけど？」

聖「どこが。俺の方がイケメンだし」

加瀬、はははと笑って、

加瀬「僕はミヨちゃんと本気で向き合ってる。もちろん妻とは別れることも考えてる。だから信じてくれないかな、彼女のためにも」
聖「さっさと別れるよ、そんであいつからも手を引け」

加瀬「残念だけど彼女を理解してあげられるのは僕だけだよ」

加瀬を睨む聖。

加瀬「君じゃない。わかるだろ？」

聖「……あんた本当に気持ち悪いわ」

席を立つ聖の手を引いて、

加瀬「これ渡しといてよ。君の分もある」

と、手土産を渡す。

聖「フレンチトーストもプリンも、あいつに似合わねーの」

聖、それを近くのごみ箱に投げ入れてそのまま去っていく。

○同・病室

ミヨがもみじ饅頭を頬張っている。

ミヨ「んまー」

木下も、饅頭を手にしていて、

木下「揚げてんの、初めて食べます」

美奈子、お茶を注いでいて、

美奈子「聖くん遅いわね」

ミヨ「どうせその辺のナース引っかけてるだ

けだから、ほっといていい」

木下「先輩にイケメンの幼馴染がいたとは。

恋バナとかないんですか」

美奈子「それがないのよー勿体ないわ」

ミヨ「願い下げだっつもの。あんな最低外道男」

美奈子「またそんなこと言って。聖くん双子

の妹もいてね。またこれが美女なのよ、

楽しみね〜ドレス姿」

「……？」と美奈子を見るミヨ。

美奈子「なに、あんた。聞いてないの？ 聖

くんから結婚式のこと」

咳き込むミヨ。

木下「ちよつきたな、大丈夫ですか？」

ミヨ「（咳き込みつつ）……結婚式……？」

木下、自分のハンカチを差し出し、

木下「拭いて下さい。返さなくていいんで」

美奈子「そう、星南ちゃんの結婚式」

ミヨ「……結婚するの……星南が？」

美奈子「おかしいわね、星南ちゃんの式の招待状渡すからあなたの住所教えてくれって、聖くん言ってたんだけど」

ミヨ「……聞いて、ない」

美奈子「あらそう、あの星南ちゃんが結婚よ。ね、あんたも誰かい人、いないの？」

ミヨ、どこか上の空で、

ミヨ「……うん……」

美奈子「うんって何よそれ。ねえ木下さん

は？ どう、うちのミヨ」

木下「えー困りますよ。自分彼女いるし」

美奈子「あら残念。木下さんも結婚とか考えてるの？」

ミヨ「ちよつと、やめてよもう」

木下「まー、考えないこともないですかね」

美奈子「ほらあんた聞いた？　こんな若い子も考えてんのよ」

ミヨ「はいはい……わかってるって」

美奈子「もー、早く結婚して安心させてよママのこと。男ならいいけど、女はやっばり早く結婚しなきゃ、ねえ」

木下「そーゆーもんですかねえ」

美奈子「そうよ」

饒舌な母にイライラしてくるミヨ。

美奈子「おばあちゃんにも結婚式見せてやりたいじゃない？　お母さん、おばあちゃんに親孝行したいのよ。あんた聞いている」

ミヨ「……私、まだ仕事したいし」

美奈子「子ども産んでからでもいいじゃない、仕事なんて。早く生まないと、体のこともあるんだから」

こらえている様子のミヨ。

美奈子「お母さんも孫の顔見せてほしいし、おばあちゃんだって……」

ミヨ「別にお母さんとおばあちゃんのために
結婚するわけじゃないんだけど！」

木下「先輩、ちよつと」

美奈子「なあに、急に大きな声だして……」

ミヨ「子どもだって！ 親のために産むわけ
でも、生まれるわけでもないでしょ！？」

美奈子「なんでそんな怒るのよ、親が孫の顔
みたいのなんて当たり前じゃない！」

ミヨ「私だっているいろいろ考えてる、自分のこ
とはお母さんより考えてるよ……でも結

婚だけが幸せじゃないでしょ」

美奈子「なにあんた結婚しないつもり？」

ミヨ「……別にしないわけじゃ……」

美奈子「わかんないわよ、なんなのあんた」

ミヨ「……お母さんにはわからないよ、私の
ことなんて」

美奈子「なあに、こどもみたいに不貞腐れて」

聖「おばさん、ストップストップ」

いつの間にか聖、戻って来ていて、

聖「やめてあげてよ、木下かわいそう」

木下「わー助かった〜、もう俺耐えきれない
つすよ〜、先輩親子の喧嘩なんて」

聖「おう、よしよし。お前役立たずだな！」

木下「わお、シンプルにひどい！」

二人のやり取りを居心地悪そうに笑っている美奈子を見て、目をそらすミヨ。

○同・病室（夜）

月明りが窓から差し込んできている。

窓に背を向け寝ているミヨ、横の仕切りカーテンを見つめ、

ミヨ「ねえ、聖。起きてる？」

カーテンの向こうから物音はしない。

ミヨ「私、お母さんとかあんたと話していると過去に引きずられる」

仰向けになって目を閉じ、

ミヨ「あの田舎の息苦しさに引き戻される。

それがすごくやだ」

仕切りの向こう。

仰向けで目を開き寝転がっている聖。

ミヨの声「ねえ、あんたさ、なんで言わなかったの……結婚式のこと」

物音を立てずじっと聞いている聖。

まっすぐ天井を見ているミヨ。

ミヨ「呼びたくないくせに、なんで来たの」

向こうからは何の物音も聞こえない。

ミヨ、窓の方を向いて、目を閉じる。

聖もまた、静かに目を閉じる。

○同・病室

もみじ饅頭を食べているミヨ。

横には美奈子が気まずそうに座ってて、

美奈子「お母さん夕方には田舎帰るから……」

ミヨ、黙ってもしかもしや食べ続けて
いる。

隣の聖、興味なさげに横を見て、

聖「太るぞお前」

ミヨ「うるさい」

美奈子「それだけ食べれるなら体は大丈夫ね」

ミヨ「……わざわざごめん」

美奈子「親なんだから当たり前でしょ」

食べ続けていたミヨ、急に眉をしかめ、

ミヨ「お腹、いたい……」

美奈子「あらやだ、昨日までだから大丈夫か

と思っただけだ」

ミヨ「お母さんくっ！？？」

美奈子「だってあんたこれ好物じゃない」

聖、ミヨを片手で抱えて、

聖「はいはいおばあちゃん、トイレ行くよ」

ミヨ「くうう、屈辱」

○同・トイレ前

聖、女子トイレに向かって、

聖「待ってるから」

ミヨの声「待たんでいい！　すぐさま戻れ」

軽く笑ってその場から離れる聖。

向こうで小さく手をあげている加瀬に

舌打ちをして、通り過ぎようとする。

加瀬「ねえ待ってよ」

聖「残念、今日もかーちゃんきてっから」

加瀬「いいよ、君に会いに来たんだから」

○同・待合室

昨日と同じ位置に座っている聖と加瀬。

加瀬「どうすれば信じてくれるのかなって」

聖「てめえも諦めわりいな」

加瀬「そーゆーところも君と似てるでしょ？」

聖「あ？」

加瀬「見てればわかるよ、君の気持ち」

聖「何が言いたい」

加瀬「彼女は君のことそんな風に見てないよ」

聖、鋭く加瀬を睨むも、

聖「……あんたは違うでしょ？」

と、にやりと笑う聖。

○同・廊下

車椅子のミヨ、部屋に戻る途中。

美奈子の声「あらあら、まあまあまあ」

声の方に、顔を向け、目を見開くミヨ。

角に隠れ、様子を伺うように部屋の前を覗く。

美奈子に案内され、病室に入っていくのは星南（29）である。

ミヨ「星南……」

動揺しつつ病室前まで進み扉を開けよ
うとするも、手が止まる。

中から二人の会話が聞こえてくる。

美奈子の声「たぶんすぐ戻ってくると思うわ」

星南の声「はい」

美奈子の声「あの子も会いたいと思うわく、

いつぶり？」

星南「卒業以来なので十年ですかね」

× × ×

回想。フラッシュユ。

高校生姿の星南がこちらを振り返って、
屈託なく笑う。

星南「みよん」

× × ×

困ったように笑っていて、

星南「わたしはそういうの無理かな」

× × ×

戻って現在の病室前。

ドアを開けようとする手が震え、固ま
ってしまいうみヨ。

聖の声「おい」

振り返ると、聖と加瀬が。

みヨ「加瀬さん、なん……で」

聖、加瀬に、

聖「ちょっとこいつどっか連れてって」

と、中に入っていくドアを閉める聖。

星南の声「聖、みよんは一緒じゃないの？」

聖の声「帰ってくんない。俺に任せてって言

ったじゃん、勝手なことすんなって」

星南の声「でも……」

加瀬に手を握られるみヨ。

加瀬「いこ、みよちゃん」

その場から離れる二人。

○同・テラス

下の方を見ているみヨと、コーヒーを
飲んでいる加瀬。

正面玄関から星南と聖が出てくる。
元氣のない星南に追っ払うような仕事を
する聖。

仕方なく去っていく星南。

加瀬 「きれいな子だね」

ミヨ 「うん……変わらない」

星南を目で追うミヨ。

加瀬 「ミヨちゃんのタイプだね」

少し驚いて加瀬を見るミヨ。

加瀬 「見てればわかるってー」

ミヨ 「はは、だよね……」

加瀬 「フラれた相手？」

ミヨ 「（首を振り）怖くて言えなかった」

加瀬 「人に言えない恋って寂しいね」

ミヨ 「加瀬さんも覚えあり？」

加瀬 「言えないことしかしてきてないしね」

ミヨ 「ばっかみたい」

加瀬 「だって知りたいじゃん？ 本物の愛っ

てやつをさ」

ミヨ 「本物の愛ってなに」

加瀬 「わかんないからずっと探してんの。変わらないうものなんてない世の中で、変わらないものをさ」

ミヨ 「加瀬さんには見つかりっこないよ」

加瀬 「そー？ 周りには話せない恋を話せる相手っていうのも愛なんじゃない」

ミヨ 「都合よくない？」

加瀬 「ねえ教えてよ、どんな恋だったの？」
少しの間。空に目をやると少し日が暮れてきている。

ミヨ 「星南は私の全てだった。田舎はほんとなんもないところで。山とか田んぼとかばかり。世界には私と星南しかいない気がして。私にとって、星南が世界の全て。ずっと変わらないと思ってた。そんな恋だったんだよ」

ミヨにキスする加瀬。

ミヨ 「なんで今」

加瀬 「なんかすごく綺麗だったから」

ミヨ 「意味わかんない」

笑い合う二人。

○同・廊下

二人の様子を窓越しに見ている聖、その場から去っていく。

○同・病室

聖「帰ったんか不倫相手は」

ミヨ、聖を睨むも、呆れた感じで、

ミヨ「あんたさ、星南に頼まれて東京に来たんでしょ？ 相変わらず妹思いだね」

聖、ミヨに何かを差し出し、

聖「結婚式の招待状」

ミヨ「申し訳ないけど、私は行かないから。

会いたくないの。あんただって私に来て

ほしくないでしょ？」

聖「めんどくせーな。俺の気持ちは関係ない」

ミヨ「は？ 関係ない？ 関係ないならなん

で……」

冷たくこちらをジッと見る聖。

ミヨ、悔しそうに目をそらし、
ミヨ「あんたも怪我直ったんならさっさと出
てって。もう昔のこと思い出したくない」

○病室（朝）

目を覚ますミヨ。

隣のベッドは整理整頓されている。

ミヨM「目を覚ますと、聖はいなかった」

スマホを取り出し、履歴の聖の番号を
タップしようとする手が止まる。

加瀬に『会いたい』とメッセージを送
る。すぐに既読がつく。

加瀬からは『素直なの珍しいね』来る。
そのあとすぐに『待ってて』とメッセ
ージを見て、安心したように笑うミヨ。

○回想・居酒屋（夜）

納会が行われ、店内はサラリーマンた
ちで賑わっている。その一角でミヨ

（26）が課長に絡まれている。

課長「ねえねえ、近江さん彼氏いるの？」

ミヨ「いえいませんけど」

課長「えー、若くて綺麗なのに勿体ないよー、今のうちに遊んでおかないと」

ミヨ「はあ……」

そこへ加瀬（35）やってきて、

加瀬「課長、向こうのリーダーそろそろ帰っちゃいますよ」

課長「それはまずい。どこだい」

どっこいしよと席を立ち去っていく。

加瀬「あの人、面倒でしょ」

と、ミヨの隣に座る。

ミヨ「あはは、助け舟ありがとうございます」

加瀬「近江さんって大人びてるよね、うちの

部署の近江さんの同期の子とかもってキ

ャピキヤピしてるよ」

ミヨ「加瀬さんこそ、あの課長より課長っぽいですよ」

加瀬、少し驚いて、

加瀬「ごめん、全然嬉しくないこと言った

ね？」

ミヨ「言った側が誉め言葉でも受け取り側からしたらわからないものですからね」

と、グラスを少し掲げて笑う。

加瀬「失礼しました」

と、グラス掲げ、カチンとぶつける。

加瀬「ねえ、一個聞いていい？」

ミヨ「なんですか？」

加瀬「同性を好きになったことあるでしょ？」

周りの賑わう声が一層大きく聞こえる。

固まって目を見開くミヨ。

ミヨ「な、に言ってるんですか」

加瀬「わかるんだよね、僕も一緒だから」

ミヨ「……だって加瀬さん、お子さんも」

加瀬「ねえ僕とは？ 本物の恋できないかな」

目をぱちくりさせるミヨ。

ミヨM「そうして加瀬さんとの上書きの恋が始まった」

○同・病室

ミヨが本を読んでいると扉が開いて、

木下の声「せんぱーい、またきましたよっ」

木下の後ろから加瀬が顔を出し、

加瀬「どうも」

ミヨ「……どうも」

木下「加瀬さん入口で会ったんですよ（部

屋を見渡し）あれ聖さんは？」

ミヨ「さあ。起きたらいなかった」

木下「えー、スマブラ持ってきたのに」

ミヨ「いやここ友達んちじゃないから。なん

でそんな仲良くなってるのよ」

木下「聖さんイケメンだし、面白いじゃん」

ミヨ「だから中学生かっつての」

加瀬「退院したの？」

木下「加瀬さんも聖さん知ってるんですか」

一瞬止まって、にっこり笑う加瀬。

加瀬「あーそう昨日ね」

木下「お見舞い初めてじゃないんですか？」

加瀬「昨日来たら、近江さんは検査で今いな

いって彼が教えてくれたんだよ」

木下「へえー、加瀬さんも物好きですね。先輩のお見舞いに二度も来るって」

ミヨ「お前が言うな」

加瀬「いつも顔合わせてたのに寂しいじゃない？ 顔見られてよかったよ」

木下「もー加瀬さんったらそんなこと言っちゃって。先輩みたいな喪女には危険」

加瀬「もじよ……？」

ミヨ「お前は私を何だと思ってるんだ」

木下、あつと思いだし、

木下「あ、俺となりの部屋でババ抜き大会あるんでちよつと失礼しますね」

と、出ていく。

加瀬「木下くんって面白いよね」

ミヨ「妙に誰とでも仲良くなるから」

加瀬「それで聖くんいなくなって寂しい？」

ミヨ、薄く笑って、首を振り、

ミヨ「星南と仲良かったから、自然にあいつとも仲良くなったただけだよ」

○回想・高校・下駄箱

聖（18）に体当たりするミヨ。

ミヨ「星南は？」

聖「委員会。お前自分の体重考えろよ」

ミヨ「あんたこそもつと鍛えれば？ モテな

いよ」

聖「はい？ 誰が？ 俺がモテないなら君は」

ミヨ「（被せて）失礼しました、ほらいくよ」

「?!」と肩に両手をクロスして、身

を引いてこちらを見る聖。

ミヨ「襲わねえわ！ 帰るんでしょーが」

○回想・防波堤

防波堤を歩くミヨの後ろに続く聖。

ミヨ「いーっしょ、ここ！」

聖「遠回りじゃん」

ミヨ「星南とこの道見つけてさ、聖にも教え

てあげようと思ってたんだ」

前を歩くミヨを見ている聖。

聖「……なあ」

ミヨ「なに？　ねえ、めっちゃ今日海青い」

聖「ずっと聞きたかったことあんだけど」

振り返るミヨ。

ミヨ「だからなによ、怖い」

冷たい目でまっすぐこちらを見る聖。

聖「お前さ。星南のこと好きなんでしょ？」

何も言い返せないミヨ。

ミヨM「誤魔化せばよかった。でもあの目は

ごまかせないと思った」

防波堤に立つ二人が海に切り抜かれて、

シルエット風に見える。

走り去るミヨ。立ち止まったままの聖。

ミヨM「あの時の海の青さを今も覚えてる」

○回想・教室

星南がミヨの元にやってきて、

星南「ねえなんか聖と喧嘩した？」

ミヨ「な、なんで」

星南「機嫌悪くて。みよんとなんかあったの
かなって」

ミヨ「なんも聞いてないの？」

星南「だからみよんに聞いてるんじゃない？」

安心したような複雑な表情のミヨ。

ミヨM「束の間の、安心だった」

○回想・田んぼ道

並んで帰っている星南とミヨ。

前方に聖が待っているのを見つける。

星南「あ」

聖もこちらに気づき、歩いてくる。

緊張の走った表情の聖とミヨ。

星南「（二人を見て）もー早く仲直りしなよ」

ミヨ「じゃ、私ここで」

通り過ぎようとする腕を聖につかまれ、

ミヨ「放して」

聖は星南を見ていて、

聖「星南」

星南「？ なーに」

聖「お前さ、こいつのこと好き？」

星南「えー、大好きに決まってるじゃん」

心臓の音が大きくなってくるミヨ。

聖「こいつと結婚したい？」

星南「えーなに、どういうこと？」

ミヨ、聖の腕をつかんで、

ミヨ「（消え入りそうな声で）やめて」

聖「……」

ミヨ「やめて、お願い……」

聖「だからこいつと恋人になれるかって話」

今にも泣きだしそうなミヨ、祈るよう

に目をつぶる。

星南「うーーん……」

振り返り、星南を見るミヨ。

星南「私はそういうの、無理かな」

と、困ったように眉を下げ笑う。

ミヨ「は、ははは……」

気が抜けたように笑いだすミヨ。

ミヨ「そりゃそーだよ、あんた何言ってるの」

と、聖を力なく叩く。

ミヨ「（聖にしか聞こえない声で）大っ嫌い」
腕を振り払い、立ち去る。

○戻って病院・テラス

誰もいないテラスを眺めるミヨ。

日が当たり、心地よさそうに見える。

ミヨ M「あいつが何をしたかったのかわからない。でも私の恋を終わらせるのには十分だった」

テラスに出ると、突風が吹く。

ミヨ・星南の声「びっくりした」

「！」と振り返るミヨ。そこには星南が髪を整えつつ、笑っていて、

星南「久しぶり、みよん」

ミヨ「……星南」

星南「足、どう？」

ミヨ「見た目ほだだよ。なんかね、私回復早いみたいで明日検査して明後日退院とか」

星南「（被せて）すごく心配した」

ミヨ「うん、ごめん」

星南「大けがしたのに会えると思ったら喜んじゃって。最低だよね〜親友失格だよ

……」

と、まっすぐミヨを見つめ、

星南「会いたかった、すごく」

ミヨ「……うん、ごめん」

星南「ねえみよん。私何か嫌われるようなことしたのかな」

ミヨ「違う。星南を嫌うわけない。何も悪くないよ」

星南「でも」

ミヨ「忘れたいんだ、昔のこと。だから地元
に帰りたくないし、地元の子には会いた
くなかっただけだよ」

星南「みよんとずっと一緒にいたのに、何に
傷ついてたのかもわからないなんて。私、
みよんのこと何も知らなかったんだね」

ミヨ「知らなくていいんだよ」

星南「聖は自分のせいだって言ってた」

ミヨ「……あいつが……？」

星南「ミヨが出てったのは自分のせいだって」

ミヨ「そう、なんだ……」

星南「ごめんね？」

ミヨ「！　なんで星南が謝んの」

星南「私は二人が大事なのに、二人に何があったのか知らない。みよんと聖が苦しんでるのに力になれない……」

涙が溢れ、その場に泣き崩れる。

星南「ごめんね、みよん。話せなくて辛いよね？　聞いてあげられなくて……話せなくてごめんね」

溢れそうになる涙をこらえるミヨ。

ミヨM「星南の謝罪は、あの時告白できなかった私への言葉に聞こえた」

○停留所（夕）

バスを待つ二人。日が暮れ始めている。少し目の赤い星南が、明るく振舞って、

星南「結婚式、やっぱり来てくれないかな」
ミヨ「いっぱいいろんな人がお祝いしてくれるよ」

星南「いっぱいいても、みよんがいないと意味ないもん」

ふくれっ面の星南を見て笑うミヨ。

ミヨ「んー考えとく。星南痩せたよね」

星南「わかる？ 式のために頑張ってるの。

一番綺麗な状態で迎えたいから」

ミヨ「十分綺麗だよ」

星南「みよんに言われると照れちゃうな。み

よんだってすっごく綺麗になったもん。

もう都会の人って感じ。芸能人みたい」

ミヨ「相変わらず大げさだって」

星南「もしかしていい人でもいるの？」

ミヨ「えーどうかな……いい人っていうか、

同じ痛みを分け合える人、なのかな」

星南「えーなにそれ、大人」

ミヨ「でも本物になればいいなって思う」

星南「そっか。そうだったら紹介してよね」

× × ×

バスから手を振る星南。そのバスを見

送るミヨ。

加瀬の声「大丈夫？」

声の方を向くと加瀬が。

ミヨ「なんか思ったより普通に話せたかも」

× × ×

ミヨの車いすを押す加瀬。

ミヨ「あの子泣いてたの」

横顔を夕日が眩しいほどに照らす。

ミヨ「誰かのために泣くような、そんな優し

い子を、愛おしくてたまらなかった子を、

ずっと傷つけていたのかな」

と、声が震えはじめ、

ミヨ「私があの時、言えていれば、星南があ

れほど泣くことはなかったのかな」

と、すすり泣く声が小さく聞こえる。

加瀬、それをかき消すように、

加瀬「そうだ、明後日退院したら手料理振舞

わせてよ、何でも作るよ。あとで鍵貸し

てくれる？ 明日中に部屋の掃除して、

飾りつけしておくからさ」

うづくまるミヨの肩が震えている。

○同・診察室

んーと医師がレントゲンを見ている。

不安そうに見守るミヨ。

医師「君とだけ回復早いよ、左足もうく
つついてるよ」

ミヨ「あ、そうですか」

医師「もう午後には退院していいよ。あでも
無茶は禁物だよ」

○同・病院前

ポストンバックを肩にかけ、松葉杖の
ミヨがスマホを取り出す。

『半日早く追い出されたw もう家来
てますか？』と加瀬宛にメッセージ。
周りを見渡し、松葉杖をあげてタクシ
ーを止める。

○タクシー車内

スマホを見るも、加瀬からメッセージ
も来ておらず、既読にもなっていない。
木下から『一週間も早く退院とか勿体

ないですよ』とメッセージが。

それを見てふふと笑うミヨ、『バカ』
とスタンプで返す。

○ミヨのアパート・郵便ポスト

ポストのダイヤルを回し、奥に手を突
っ込み、合い鍵を取り出すミヨ。

○ミヨのアパート・玄関く廊下

扉を開けると、玄関には男性物の靴が。
松葉づえを玄関に置きつつ、

ミヨ「……ただいまー、加瀬さん来てるの？」
玄関から正面の寝室につながる奥のド
アが閉まっている。

物音と話し声が聞こえる。

ミヨ、ギブスで歩き辛そうにしつつも、
進んでいき、ドアを開ける。

○同・寝室

ミヨ「は？」

ベッドでは半裸の加瀬が聖を押し倒そうとしている。

加瀬「！ ミヨちゃん……」

まずそんな顔でこちらを見る加瀬。

聖、飄々とこちらに手を挙げ、

聖「よっ」

ミヨ、まぶたがぴくぴくしてきて、

ミヨ「……何してんの」

ミヨM「いや何しようとしてるのは明白な
んだけど」

加瀬、ひどく焦った様子で、

加瀬「いやミヨちゃんこれはね、違くて」

ミヨ「降りろ、今すぐベッドから」

加瀬、ベッドから降り、床に座る。

そのままの聖に向かって、

ミヨ「お前もだよ！」

加瀬「落ち着いて、怪我悪化しちゃうよ」

ミヨ「冷静だよ。私焦ってるように見える？」

加瀬「……とりあえずごめん、ほんとこれは
何でもないから」

聖「ひどいなー、タイプだって言ってくれたのにダーリン」

加瀬「聖くん勘弁してよお、ははは」

さらに慌てる加瀬を冷静に見るミヨ。

× × ×

フラッシュ。

ミヨの声「本物になればいいと思ってる」

星南の声「そうになったら紹介してよね」

× × ×

ミヨ「……ばっかみたい」

加瀬と聖がミヨを見る。

ミヨ「あんたらも、私も、大ばかだね」

加瀬「ミヨちゃん」

ミヨ「帰って」

「……」と服を持ち、去っていく加瀬。

ミヨ「加瀬さん」

立ち止まる加瀬。

ミヨ「あんた本物の愛なんて見つからねーよ」

去っていく加瀬。玄関が閉まる音。

ミヨ「別にあんた、あの人のこと好きじゃな
いでしょ」

聖「俺はちゃんと女の子が好きですよ？」

ミヨ「（震える声で）あんたほんと何しにき
たの」

目に涙をため睨むミヨに手を伸ばす聖。

ミヨ、その手をはねのけ、

ミヨ「あんたはいつも私の世界を壊すよね」

聖「……悪かった」

ミヨ「もうどうでもいい。消えて」

立ち去る聖。

玄関が閉まり、静寂が流れる。

放心状態のミヨ、崩れおちる。

部屋には退院おめでどうの手作りの飾
りつけが。

○アパート前（朝）

トラックが止まり、助手席の窓から木
下が顔を出し、

木下「先輩、退院おめでどうございます」

とクラッカーを放つ。

糸くずにまみれたミヨ、クラッカーの
メッセージを見て、

ミヨ「レベルアップって書いてあるけど？」

木下「失恋どんまいっ」

○トラック内

カラフルな糸が絡まったままのミヨ。

木下「幼馴染カッコ男に男を寝取られるアラ

サーって、まじ先輩すげえわ」

ミヨ「あんたはほんと人の傷口に塩コショウ
してくるよねー、なぐさめなさいよ」

木下「何ですか。よかったじゃないですか

加瀬さんと縁切れて」

「……」と少しの沈黙。

ミヨ「あんた……、知ってたの？」

木下「バレバレっすよく、どうせ納会の時

でしょ？」

ミヨ「……私あんたのことバカだと思ってた
の謝るわ」

木下「聖さんに密会のホテル教えたのも俺だ

もん」

ミヨ「はあ！？」

○ゴミ中間処理場・廊下

ヘルメットを被り、見学コースを回る

二人。後ろではゴミが運ばれている。

木下「多分失恋することになると思うから。

先輩のことよろしくって」

ミヨ「何それ意味わかんない。余計なお世話」

木下「そうかもですけど。幼馴染といえど、

そんだけ他人のことを考えて、あげくその

人に恨まれるようなことでさえやれちゃう

のってすごくないですか？」

ミヨ「あいつ、肝心なことは話さないくせに

余計なことばかり話すから」

木下「ま、俺ならそんな回りくどいことしな

いっすけどね、二人とも人付き合い不器

用っすよね」

ミヨ「どういうことよ」

木下「先輩いい加減気づいてるでしょ？」

○同・粉碎場

作業車に乗り、車窓を眺めている二人。

ミヨ「なんであいつ会いにきたんだろ」

木下「そんなん本人に聞いた方がいいに決ま

ってるっしょ。先輩は話したくないの？

せつかくレベルアップしたのに」

ミヨ「……」

木下「あ、先輩あれじゃない？」

車窓から粗大ごみのベッドが押しつぶ

されていくのが見える。

ミヨ・木下「（拍手して）おお」

○同・入口

木下が施設の従業員に手を振っている。

木下「ありがとねー」

従業員「おうよっ」

ミヨ「ほんと謎の交友関係……」

木下「ちょうど見学空いててよかったすね」

ミヨ「ありがとね。付き合ってくれて」

木下「何言ってるんすか、このままニトリ行き

ますよ。新しいベッド買わないと」

ミヨ「木下あゝ」

木下「ちゃんと老体劳わってあげないと」

ミヨ「全然好き。全然許せる」

○結婚式場（朝）

すがすがしく晴れた空。

○同・控え室前（朝）

太陽の明かりが窓から聖の顔を照らし、

目を細める。スーツ姿の聖が、新婦の

いる部屋を開ける。

○同・控え室（朝）

ウエディングドレスを着た星南。

朝日を受け、神々しくさえ見える。

星南「聖、おはよう」

聖「きれいーじゃん」

星南「もう泣きそう」

聖「泣くなよ、メイク勿体ないだろ」

星南「みよん、来てくれるかな」

聖「……悪いな」

星南、静かに首を振る。

そこへ新郎がやってきて、

新郎「ちよ聖くん、僕より目立たないでよ」

聖「それは約束できないなー、義弟よ」

○島の船着き場

船が乗り付け、ミヨが降り立つ。

周りを見渡している。

美奈子の声「こっち！」

軽自動車から手を振る美奈子。

○チャペル

点描。扉が開き、星南が入ってくる。

緊張した面持ちの星南を見守る聖。

ゲストの前でキスをする星南と新郎。

○美奈子の車

後部座席で着替えているミヨ。

美奈子「ほんとあんたはいつも遅いんだから。

天邪鬼よね、昔っから」

ミヨ「お母さんヒールは」

美奈子「後ろにあるでしょ、ビニール袋の中」

ミヨ、袋の中を見て、

ミヨ「これじゃなくて、真ん中にリボンついでるやつだって言ったじゃん」

美奈子「黒い靴の違いなんてわかんないわよ、いいじゃない。どうせ片方はギブスのままなんだから」

司会の声「今、おふたりは皆様の前で真実の愛をお誓いになりました」

○チャペル

星南と新郎がゲストの前に立ち、証明

書を見せている。

司会「みなさま方、おふたりのご結婚をお認めいただけますでしょうか。ご賛同の方は、

盛大な拍手を……」

と、急に開かれる扉に式場の視線が一
斉に集まる。来たのはミヨである。

ミヨ「お、遅れました……」

目を見開く聖、楽しそうに笑いだす。

驚いていた星南も、満面の笑顔になる。

恥ずかしそうに席に案内されるミヨ。

○披露宴

点描。宴会場に、きらびやかな人々。

新郎とケーキバイトをする星南。

友人たちに囲まれ、写真を撮る星南。

幸せそうに笑う星南を、席から静かに

見つめているミヨ。

そんなミヨを親族席から見つめる聖。

司会者「ここで新婦様はお色直しのため中座

させていただきます。新婦の星南さんたっ

ての希望で一緒に退場したい方がいます」

前に立つ星南が、ミヨを見る。

司会者「星南さんの大親友でいらっしやいま

す、近江ミヨさんです」

戸惑うミヨ。星南が眉を下げてくださいするように首を掲げる。

ミヨ、困りつつも、松葉杖を手に歩き出そうとするが、つまずそうになる。

そのミヨの腕を引き、支え上げる聖。

聖「送りだして、いいんだな」

ミヨ、小さく驚いて、

ミヨ「……うん」

聖がミヨを支えつつ、前に出る。

黄色い声が各所から上がる。

聖「足怪我してるんで、3人でいいすか」

星南がミヨの腕に手を回し、聖に、

星南「もう、主役より目立たたないでよね？」

聖「仕方ないっしょ？」

と、にやりする聖もミヨの腰を支える。そのままミヨを支える風に三人は退場していく。

○披露宴会場・外

扉が閉まると、ミヨが聖にアイコンタクトする。聖、その場から離れていく。ミヨと星南、少しの沈黙。

ミヨ「結婚、おめでとう」

星南「来てくれてうれしい、ほんとに」

ミヨ「星南、あのね……」

星南「うん」

なかなか言い出せないミヨ。

そこへ係の人が来て、

係員「新婦様、お色直しに」

星南「あ、はい」

星南、ミヨに向き直って、

星南「みよん、聖のことよろしくね」

と、去っていくようにする。

ミヨ「星南！」

振り返る星南。

ミヨ「好き。好きだったよ」

星南、少し驚きつつも、満面の笑みで

星南「私も大好きだよ」

と、手を振る。

どこかすっきりした顔のミヨ。

○チャペル

一人で一番前の席に座る聖。

そこへミヨがやってきて隣に座り、

聖「おまえ今日の登場、かつこよすぎ」

ミヨ「びびった。みんなこっち見るから」

聖「あのまま星南のこと、連れてくかと思っ

たわ」

ミヨ「そんなこと、しないよ」

聖「してもよかったんだよ」

少しの間。

ミヨ「私、あんたが私を星南から遠ざけた

くて、私の初恋を壊したんだと思ってた」

聖「……おう」

ミヨ「私のことが嫌いで、嫌がらせしたくて

東京に来てまで邪魔をしたのかと」

聖、ぶはっと笑いだして、

聖「そんな暇人じゃねえわ。別にお前が好き

な奴と幸せそうなら問題ねえよ」

ミヨ「あんた私のこと好きなの？」

聖「少し驚きつつも、

聖「俺の初恋はお前ですけど？」

と、穏やかに笑う。

ミヨ「……そう、だったの」

聖「お前のこと傷つけたかったわけじゃないけど、いつまでたっても俺の恋心に気づかないドンクサさに多少腹は立ってたかも」

ミヨ「結構歪んでない？ あんた」

聖「年季入ってっからなく」

ミヨ「初恋拗らせていいことないよね」

聖「で、どうなのよ、ミヨちゃんは」

ミヨ「なにが」

聖「俺と付き合う？」

ミヨ「ない。今更ない」

聖「はいはい、そうですか。ま、俺だって今

更諦めないけどね？」

ミヨ「でも。この先考えなくもない」

「！」と横のミヨを見る聖。

目を合わせようとしなないミヨを見て、

にやにやと笑う聖。

聖「やーっと意識したか、ド阿呆め」

ミヨ「サイテー男に言われたくないわ」

チャペルの窓から明かりが差し込んで
いる。

了。